

語られなかったメッセージ：トランプ大統領と小池東京都知事の言葉

著者	朴 育美
雑誌名	人権を考える
巻	21
ページ	137-141
発行年	2018-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00007808/

語られなかったメッセージ —トランプ大統領と小池東京都知事の言葉—

外国語学部准教授 朴 育美

2017年8月22日、バージニア州シャーロットビルで起きた、白人至上主義の団体とそれに抗議するデモグループとの衝突事件は、事件そのものによってのみならず、その後のトランプ大統領の発言によって全米の関心を集めた。その日、シャーロットビルでは、南部連合の英雄である、リー将軍の銅像の撤去を市議会が決定したことを受け、それに抗議する、白人至上主義者の集会が計画されていた。しかし、現場には、この集会に抗議するグループも多数集まり、現場は一触即発の緊張感に包まれていた。

ほどなく警察の取り締まりによって、白人至上主義側の集会は解散に追い込まれる。ところが、事態が沈静化したように見えたその時、白人至上主義者の男が、いきなり抗議グループのいる場所に、猛スピードの車で突っ込み、多数の負傷者と一人の死者を出すテロ事件へと発展した。

すぐに多くの政治家や有識者が、事件を卑劣なテロ行為として非難すると同時に、白人至上主義者らを名指しして糾弾した。その中で、待たれたのが、トランプ大統領からの発言である。日頃から、差別的発言が取り上げられ、また自らの政権に、差別主義者と批判される人物を積極的に登用してきたトランプ大統領が、どのようにこの事件を認識し、どのような言葉で、アメリカ国民に語りかけるのか。特に、トランプ政権の重要な支持基盤である白人至上主義者の蛮行について、どの程度踏み込んだ発言をするのが、大統領の人種問題に対するリトマス紙として関心を集めたのだ。

トランプ大統領のコメントは、非常に「中立的」なものであった。現場で起こった暴力行為や憎悪犯罪を糾弾する一方で、デモに参加した両サイドで暴力行為があったことを指摘、白人至上主義者らを名指しして糾弾することはなかった。白人至上主義者らを、抗議グループと同列に扱うともとれる大統領のコメントは、共和党内からも厳しい批判にさらされ、その数日後の記

者会見では、「白人至上主義者、ネオナチ、KKK（白人至上主義団体クー・クラックス・クラン）」を改めて名指しして非難することとなった。

通常、言葉による差別が問題になる時、「差別的な言葉を使った」という、言葉の使用が問題になる。政治家の問題発言の場合も、ほとんどは「何を言ったか」についての批判である。しかし、先日のトランプ大統領の発言で問題になったのは、語られたことではなく、語られなかった言葉だった。つまり、「白人至上主義者、ネオナチ、KKK」という言葉をあえて回避し、人種差別主義者とそれに抗議する人々を同列に扱ったことが、差別を容認する行為であるとして、激しい批判をうけたのだ。

この一年ほど前、まだ大統領候補だったトランプ氏が、「イスラム過激派」という言葉を使わないオバマ政権を厳しく批判していたことを考えると皮肉なものだ。随分と文脈は違うが、この二つの出来事は、私たちの社会におけるコミュニケーションが、特にメディアを通じて、多くのオーディエンスに向けて発信されるような場合、語られたことと同じくらい、語られなかったことを伝える側面を顕在化させてくれる。私たちは語られたことを、ミクロな言葉のレベルからだけではなく、思考の枠組で、つまり、共有する大きな社会的文脈の中で解釈しているのだ。

思想的にいわゆるリベラルといわれる人たちが、トランプ大統領が「白人至上主義者、ネオナチ、KKK」を名指ししなかったのを批判するのは、そのような言葉の回避が、アメリカ社会が共有しているはずの、大きな文脈を書き換えてしまう危険性をはらんでいると考えるからだ。その文脈とは、アメリカ社会が、凄惨な人種差別とその闘いの歴史をアイデンティティの根幹に据え、新たな自由と平等の道を切り開いていくことにコミットし続けていくという共通認識だ。

だからこそ、リベラルは、同じ言葉の回避であっても、オバマ氏が「イスラム過激派」という言葉を使わなかったことは支持する。「イスラム過激派」という言葉を繰り返し使うことが、イスラム教とテロリストを結びつける社会的文脈を創り出す懸念があると考えられるからだ。そのような文脈は、イスラム教をあたかも一つのようなグループに印象づけ、イスラム教に対する憎悪

や反感を助長することに貢献してしまう。そのようなヘイトを許容する社会は、自分たちの社会ではないという意識だ。

差別を糾弾する人々が、言葉に敏感なのは、言葉が人びとの思考に影響を及ぼし、現実を創り出すからにはほかならない。ポリティカルコレクトネスは、差別の歴史や文脈を喚起する言葉を、新しい言葉に置き換えることによって、差別されてきたグループに対する社会的認識を是正していこうという動きだった。もちろん、ポリティカルコレクトネスの運動が、言葉そのものにもあまりにも敏感になったため、糾弾の対象が、差別そのものより、目先の言葉に移ってしまい、本筋を離れた議論に陥ってしまったことも忘れてはいけない。抑圧されていたグループが、解放の手段として掲げた言葉に、逆に拘束され、非常に抑圧的にふるまうのにうんざりした人も多かった。

しかし、それでもなお、偏見や憎悪を少しでも排除しようとする社会は、語られたことであれ、語られなかったことであれ、言葉に対して慎重でなくてはならない。なぜなら言葉こそが、現実を創り、人びとの考えを方向付け、行動の根柢を与えるからだ。言葉が創り出す、偏見や憎悪の虚構によって、たくさんの虐殺や戦争が行われてきたことは、歴史が何度も示してくれている。だからこそ、言論の自由が最重要視される、民主主義の国においても、ヘイト・スピーチは規制されなくてはならないのだ。そして、憎悪や偏見を助長するのは、語られた言葉だけではなく、「語られなかったこと」も含まれるということを、特に社会的影響力を持つ政治家は、もう一度認識しなくてはならないだろう。

日本でも同じ頃、小池知事が「語らなかつたこと」が話題になった。関東大震災の直後、「朝鮮人が略奪や放火をした」「井戸に毒を投げ込んだ」等のデマが拡散し、たくさんの朝鮮人が虐殺された。その事実を踏まえ、1973年東京都墨田区に、朝鮮人犠牲者追悼の碑が建てられ、毎年9月1日にある追悼式には歴代の都知事が追悼文を送ることが慣例になってきた。小池知事も、2016年には、虐殺の犠牲になった人々に対する追悼の辞を送っている。

しかし、2017年はそれが取りやめになった。理由は、「犠牲となられたすべての方々への追悼の意を表し、特別な形での追悼文提出は控える」という

ことだ。小池知事は、会見で、虐殺の有無についての認識を問われ、「色々な歴史書の中で述べられているところだ。様々な見方があると捉えている」「歴史家がひもとくものだ」と述べ、虐殺の有無の明言もさけた。6000人とと言われる数に信憑性がなく過大評価であるとして、自民党都議に追悼文送付の見直しを求められていたことも影響したのだろうか。確かに、詳細な数字に関しては、諸説があるだろうし、それは「歴史家がひもとく」ことかもしれない。また、韓国で再び、従軍慰安婦問題や、植民地時代の強制労働の賠償請求の問題が蒸し返されていることを念頭に、日本人加害者と朝鮮人被害者という枠組みを回避したかったのだろうか。

しかし、普遍的な事実として、天災をはじめとする非常事態が、凄惨な人災を引き起こす現場になるということは、時代や空間を超え、私たちが、歴史から学び続けなければならない、大切なことではなかったか。人間というもの、追い詰められた時、その最も醜いものがむき出しになるという必然は、常に心にとめておかなくてはならない。それまで隣人として暮らしていた人が、暴力的に変貌するということが何度繰り返され、そしてこれから繰り返されなくてはいけないのか。極悪人の正体が、ごく普通の人であるということは、ハンナ・アーレントが明らかにしている。

もちろん、その一方で、自分の命を危険に晒しても、多数派の言論の流れに抗い、不正義に立ち向かう人がいたことも忘れてはいけない。非常時にこそ、私たちの人間性が試されるのであり、そのような時に、人間性を失わないためにも、私たちは歴史から学び、自ら考えることを放棄するわけにはいかないのだ。国や民族の枠組みを重視する政治が、人間の本质にかかわる議論を骨抜きにしまってはならない。

2016年に実現した、現職アメリカ大統領であるオバマ氏の広島訪問も、簡単なことではなかった。現職アメリカ大統領としてのオバマ氏のスピーチも、大変な政治的制約のなかで、最後まで推敲が重ねられた。それでも被害者への心からの追悼と、平和な未来への、全ての人の道義的責任を訴えたスピーチは、強いメッセージとなった。政治的配慮から謝罪の言葉そのものがなくても、伝えるべきものがあり、またそれは伝わるということを目の当たりに

したように思う。政治家の歴史認識は、国が目指す社会の在り方と表裏一体である以上、政治家は、歴史認識を歴史家に丸投げするわけにはいかない。政治家の中には、歴史に終止符を打つことと、未来志向を等式で考えている人がいるように思われる。一方、ドイツのメルケル首相は「歴史に終止符はない」と言い切っていたが、この歴史を終わらせないというコミットメントこそが、未来志向の本質ではないだろうか。歴史を深く受け止め、間違った行為を再び繰り返さないことを未来の信念に据える。その一貫した態度が、ナチスドイツのスティグマ (stigma: 負の烙印) にも関わらず、ドイツが国際社会から現在の信頼を勝ち取った理由の一つだろう。歴史から学ぶことを忘れ、そこに終止符を打ってしまうのは、まさに「終わりの始まり」なのだ。

参考文献

アーレント・ハンナ『イエルサレムのアイヒマン—悪の陳腐さについての報告』大久保和郎訳、みすず書房、1969年。

師岡康子『ヘイト・スピーチとは何か』岩波新書、2013年。

Fairclough, Norman. *Critical Discourse Analysis*. London and New York: Longman, 1995.

Fairclough, Norman. *Language and Power* 2nd edition: London and New York: Longman, 2001.

Gitlin, Todd. *The Twilight of Common Dreams: Why America Is Wracked by Cultural Wars*. Owllet, 1996.